

奈良のこと (古都)

(4) 興福寺・春日大社

南都7大寺とは一般に次の寺で、天皇勅願だけでなく藤原氏や蘇我氏の氏寺もある。

興福寺（藤原氏の氏寺）：京都山科の山階寺が起源

東大寺（天皇の勅願寺）：聖武天皇の発願

西大寺（天皇の勅願寺）：孝謙上皇の発願

薬師寺（天皇の勅願寺）：天武天皇の発願

元興寺（蘇我氏の氏寺）：蘇我馬子が飛鳥に建立した法興寺を前身とする。

大安寺（天皇の勅願寺）：聖徳太子の建立した熊凝精舎が起源

唐招提寺（鑑真の戒律修行の道場）

（唐招提寺に代わりに法隆寺が含まれる事もある）

飛鳥から藤原京、更に平城京へ都が遷るに従って、興福寺、薬師寺、元興寺、大安寺等が藤原京から従って来るが、平安京への遷都では移転を拒まれたようだ。そして、今日現在も奈良の都（みやこ）に1300年前の姿を留めている。

興福寺

奈良に都が遷った頃、天皇を補佐する実力者は大化の改新で功績のあった中臣鎌足（藤原鎌足）の息子：藤原不比等であった。

不比等は都の一等地（都を一望出来る北東の丘）に、藤原氏の氏寺を建立した。

主な建物は710年から734年までの間に完成するが、度重なる戦火などで創建当初のものは皆無となっている。東金堂や五重塔は6度目の再建で室町時代の建造だが、藤原氏の権力と経済力で、焼失後直ちに創建当初と同じ姿（奈良時代からの伝統的様式である和様を守って）で再建を果している。（天皇勅願の東大寺では、大仏殿が140年もの間再建出来なかったのと大きな違い。しかも、創建当初とは異なる「大仏様」（合理的構造で安価）での再建となっている。）

建物名	(創建年)	再建回数 (再建年)
中金堂	(710年)	8度目の再建中 (2018年完成の予定)
北円堂	(720年)	3度目の再建 (1210年)
東金堂	(726年)	6度目の再建 (1415年)
五重塔	(730年)	6度目の再建 (1426年)
西金堂	(734年)	1717年に焼失：再建の計画無し
南円堂	(813年)	5度目の再建 (1741年)
三重塔	(1143年)	2度目の再建 (1187年)：現存中で最も古い

*南円堂は重要文化財、他は全て国宝である。

食堂は1874年に廃仏毀釈のあおりで取り壊されたが、遺構の跡に創建当初の外観を残した鉄筋コンクリートの「宝物館」が1959年に建造された。

明治の廃仏毀釈の混乱では、五重塔が売却されてしまった。購入者は塔上部の青銅製相輪を回収するのが目的で、そのために塔を燃やそうとしたが、近隣住民の猛反対で断念せざるを得なかったとの事だ。危ういところで国宝の塔も生き残ることが出来たようである。

五重塔は南門下にある猿沢の池からの眺めが最高だと思っている。



また、ここから興福寺へ行くには「五十二段」の石段を登る。(52には意味があり：仏教を極める為に善財童子が52人の善知識に教えを請い、53人目が文殊菩薩である)石段の上には東金堂があり、文殊菩薩が待っておられる。

興福寺の仏像

興福寺のトップスターは「阿修羅」であろう。元は西金堂に祀られていた「八部衆」(釈迦如来の眷属)の一人で、少年の様な姿で人気を博しているが、元来は武闘派の仏で帝釈天と猛烈な戦いをしたことで有名である。(三十三間堂の阿修羅は怒りの表情である)

平安時代以降、興福寺は僧兵を擁し、大和の国の守護として権力を誇っていた。明治の廃仏毀釈では時の政府から目の敵とされたため、一時は廃寺となりお寺は荒廃し、数多くの仏像などは流出してしまった。

現存する国宝の仏像数は、興福寺(17)、東大寺(13)、法隆寺(17)で、もし流出もなく残っていれば、この何倍もの数になるはずであり、思えば残念な話である。

現存する国宝の仏像数は、興福寺(17)、東大寺(13)、法隆寺(17)で、もし流出もなく残っていれば、この何倍もの数になるはずであり、思えば残念な話である。



「十大弟子」(釈迦如来の側近)も西金堂由来で、本尊の釈迦如来の側に置かれていた。何れも乾漆像(高価な漆を大量に使用)で、軽いため火災の時にも簡単に運び出されたので、今日まで残れたのであろう。

北円堂(弥勒三尊)、東金堂(薬師三尊：脇侍の日月光菩薩は国宝だが、本尊は重要文化財)、南円堂(不空絹策観音)、国宝館(千手観音)など、何れの仏像も国宝である。

国宝館の仏頭(国宝)は白鳳時代の薬師如来のもので、元は飛鳥の山田寺(蘇我氏の氏寺)の本尊であった。1187年に興福寺に運ばれ東金堂の本尊となるが、1411年の火災で体を失い頭部のみとなった、以来約500年の間行方不明であったが、1937年の東金堂解体修理の時に本尊台座の中から発見され大騒ぎとなった。白鳳時代仏像の特徴を持つ、素晴らしい風貌である。(白鳳のイケメンか?)

春日大社

768年に創建され、4柱の神を祀るが、雷神（剣神）、水神とその妻などである。現代でも同様だが、地形から奈良時代には特に水は貴重で、農業や日常生活に欠かせないものであった。天気予報の無かった奈良時代では、大雨や干魃の無い事をひたすら神に祈るしかなかった。第一神「タケミカズチノミコト」は鹿島神宮から白鹿に乗って御蓋山（みかさやま）に降り立たれたと伝えられる。鹿は春日大社のお使いとして大事にされている。



奈良公園には約2000頭の鹿がおり、これらは神鹿として昔から大事にされてきており、今は天然記念物として保護されている。鹿達は野生であり、草や木の実などを食べて自活している。奈良公園の芝は何時も綺麗に刈り込まれているが、全て鹿がいるお陰である。もし奈良市が機械でやるとすれば莫大な費用が必要になるそうである。

春日大社は藤原氏の氏神であり、氏寺興福寺と一心同体の関係にあり、明治の廃仏毀釈は全てを興福寺が取り仕切っていた。

また、平城京の守護神としても大きな役割を果たしていた。

都が平安京に遷ってから、天皇家や藤原氏、貴族などの社参などを受け栄えていた。中世になると、武神や剣神としての性格が高まり、武運長久を願う武家の源氏、足利氏、豊臣氏などから厚い信仰を受ける。（「天地人」上杉家家老：直江兼継の献納した吊り灯籠も残っている）。室町以降では庶民の現世利益指向が大きくなり、庶民の春日講、七五三参りなどが盛んになって行く。春日さんと呼ばれ大和の人々に親しまれてきた。

春日大社には約2000基の石灯籠と約1000基の青銅製吊灯籠があり、平安時代（最古の灯籠は、1137年に藤原忠通寄進の柚の木灯籠）から現代まで、様々な様式の姿を残している。節分と中元（お盆）の万灯籠では全ての灯籠に明かりが点され見事である。

春日若宮おん祭

春日大社・摂社若宮の祭礼で、毎年12月15日から17日に行われる。「春日若宮おん祭の神事芸能」は重要無形民族文化財に指定されており、神楽や田楽、舞楽、猿楽（能）、雅楽など古典芸能の継承・保存に大いに役立っている。

若宮の祭神「アメノオシクモネノミコト」（春日大社・第3神「アメノコヤネノミコト」の子供）は、水・学問・芸能の神様で、12月17日の午前0時から丸一日、御旅所に遷座し（遷幸の儀）、各種芸能の奉納を受けられる。

17日の「お渡り式」は、正午から「日使」（勅使）を先頭に猿楽、田楽、流鏝馬など一行（平安時代から江戸時代に至る風俗で彩られており、とても美しい。）が、興福寺を出発し、一ノ鳥居を入った所にある「影向の松」で、各種芸能を披露し御旅所に向かう。

奈良では大変寒い時期で小雪が舞ったりするが、深夜暗闇の「遷幸の儀」には、大勢の観光客が暗闇の中で行われる神事を見ようと集まってくる。